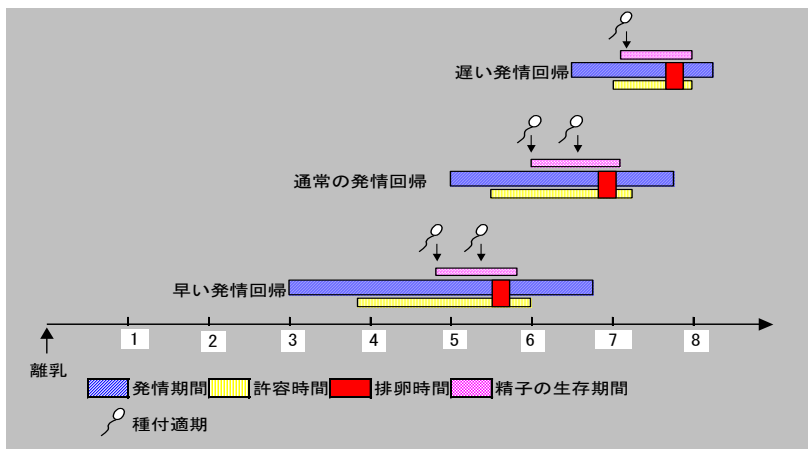


受胎率安定のためのヒント

最適な種付適期とは？(母豚側の要因)

成績の要であるギルトの場合は、まず良い発情を確認し、2回目あるいは3回目で確実に付けることです。経産の離乳母豚は、発情(許容)は早いものでは3日目から始まり、7日目以内に種付けを済ませることが目標です。彼らは通常、高い受胎率と産子数が期待できます。分娩舎でよく食べさせることが出来れば、子宮の修復も早いので早くはっきりした発情が来る可能性が高くなります。

離乳後の発情が早いものほど許容までの期間、および持続期間も長いことも広く知られています(下図)。そのため早く来た場合は種付を少し遅らせ気味にすること、遅く来る場合は発情がやや弱い傾向があるので、精子が排卵時に子宮末端の卵管膨大部まで到達できないことのないように早めに付ける必要もあります。遅い場合は1回しか付けられない場合もあります(下図参照)。



一般にいう発情とは母豚が許容姿勢をとっている状態のことを指しますが、許容確認後 30 時間後に 1 回目の種付けをする(ミアヘッド[®]、1999)のが最も一般的と言われています。朝発情を見つけて直ぐに付ける、その夕方 2 回目を行い、翌日朝付けした場合、許容期間が長い場合には前 2 回の種付けは早すぎる場合もあります。従って、離乳後 5 日以内に発情が来る場合は(ほとんどがこうしたケースでしょうが)、比較的長く発情が継続することを予見し、朝発見

したなら、翌朝。夕方発見したら、翌日の夕方を初回の種付けとした方が良いかもしれません。あくまでも農場や管理者により微妙に違い一概には言えませんが、成績アップがなかなかできない農場や管理者には試してみる価値はあると思います。

精液の活力と衛生レベル(精液側の要因)

雄の精液は管理のよってかなり活力レベルなどが減退します。特に夏の暑さ、個体差が一番の原因ですが、採取した時と使用前の精液は必ず活力の検査をしてチェックを入れましょう。

自家採取している農場では、精液にできるだけ雑菌を混入させないように注意しましょう。なぜなら活力低下に直結するからです。また、母豚の陰部やお尻が汚れたまま種付けしてしまうと、雑菌を注入しかねませんので衛生レベルにはことさら注意しましょう。母豚は何も知らないで種付けされます。こうして仮に雑菌と一緒に注入されたら、受胎はしたもののオリモノを頻繁に示し、場合によっては再発を起こすこともあります。もしも受胎率などに支障があったら、精液の質、衛生レベルや雄の疾病問題(雄側)を、受け入れ側としての母豚の体表の衛生レベルや健康度(体を洗う、そして十分な水が飲んでいるか)等も再チェックしてみる必要があります。

注入時のチェックポイント(管理者側の要因)

発情の確認も、精液の注入も管理者が行う仕事です。母豚の受け入れ態勢、良好な精子が生産される過程等、雄側の要因も要チェックですが、管理者がどの様に注入するか、あるいは注入時にどのあたりに留意して種付けを行っているのかなどもチェックする必要があります。一番良いのは成績を上げている生産者からヒントを得るのが一つですが、複雑な要因が絡むのと豚舎の立地や環境も大きく影響するので簡単ではありません。管理者にできることは基本的に忠実に精液を扱うことですが、上手に雄を利用して発情を最大限に発揮させる工夫も考えてみましょう。そうした意味では全く無害なパイプカット豚(*)を作出しておくことも良いと思います。あるアメリカの農場では、4歳以上の大きなパイプカット豚でさえも離乳後の母豚群と混ぜられていてビックリしましたが、「仮に乗っても大丈夫、強い発情を呼び起こせる」と農場の生産者が言っていました。もちろん

ん全部人工授精で種付けされています。

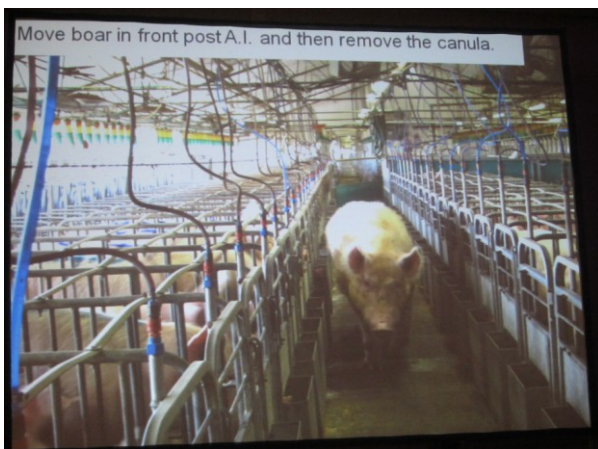
(*)パイプカット豚:精管だけを切断した精子を出さない雄豚(2週令以降でカット)

そのほか、発情(許容)状態を最大限に引き出すのに、AIクリッパーを装着させて許容状態を強く確実にすることでよい感触をつかんでいる農場もあります。

AIゲルなどのスベリ補助剤は、意外に母豚、特にギルトの挿入時のストレスを軽減する効果があると思います。スポンジ型のカテーテルを利用されている農場は、挿入しやすさから日常的に使用されていますが、こうしたことも一つのヒントになることでしょう。



離乳4日目の母豚、強い発情はアメリカ人が乗っても全く動かない。耳の挙動にも注意。



交配後はカテーテルをそのままにしてしばらく放置しておくことがポイント。その際雄を母豚の前を歩かせて収縮を誘い、その後抜くことで安定した成績を上げている農場も欧米にはあるようです。私は初めて耳にしましたが、欧米先進国では普及した方法だそうです。

良い発情・種付け・受胎のための農場ヒント(改訂版:2011.10)

- ① 発情を迎える母豚は管理しやすいように並べる。できるだけローテーションで雄を入れ替え、直接鼻同士の接触をさせる。運動は効果あるので積極的に。
- ② 離乳後、直腸検査で頸管部をしごいて物理的な刺激を与え、頸管の硬さで発情の度合いを確認する農場もある(離乳後2日目、4日目)。適度な硬さ=許容と判断されることもあるが、母豚にはストレスなので頻用には十分注意が必要。
- ③ 分娩舎の管理が優れ、母豚がほとんどやせない農場でも離乳以降のましがいいが必要。
- ④ 離乳後7日以降になると母豚が受胎しにくくなり(母体としての受け入れは未熟か終了状態)、14日以降では逆に受胎しやすくなるので、1回飛ばしたほうがよりよい発情が来ることがある。1回飛ばしをもっとフレキシブルに受け入れる。
- ⑤ オリモノが目立ち、受胎率が思わしくない農場では、精液への雑菌混入の有無を検討する。可能性があるなら採取の前に、できるだけ絞り出しておくことが効果的な場合もある。
- ⑥ 発情の前後に腰への刺激が許容を助長する(AIクリッパーを一定時間装着)。
- ⑦ 精液注入の後、しばらくカテーテルを装着したまま、雄を前面に歩かせる。
- ⑧ 受精卵が卵管から子宮着床部位まで降りてくるのに2日掛かる。種付け後2~3日は飼料レベルを維持レベルに下げて受精卵の死滅を防ぐ(1.8~2.0kg)。
- ⑨ 種付け後の様々な管理の変更、ペンの移動などは種付け直後に済ませる。その後であれば受胎確認後(21~42日)に行く。種付け後10日~18日は決して動かしてはいけない!
- ⑩ 受胎したと思っても最低1周期は慎重な管理が必要。1周期以内に隣、あるいは後ろに雄を置いたり、強い豚がいたずらしないように極力管理する。気付かないうちに不受胎になることもあるので注意。鑑定前のデリケート時期には音や振動、往来の激しい通り道には置かないようにする。
- ⑪ 候補豚にオリモノが見られ、繁殖性が下降している農場は、不衛生な証拠なので定期的な豚舎洗浄、母豚洗浄、1日1回のカーテン開放など、まず母豚の健康に十分気を配る。